

大和神社のつめなし竜

宮地の小さな山の上に、大和神社が祭られとる。

お宮の拝殿には、みごとな竜の彫り物があるんじゃ。

この竜は、たいそう腕のええ大工が彫ったと言われとるが、
大工の名は伝わってないんじゃ。

大和神社の北側の谷には、八幡池というため池があって、
下流の田んぼの水として大切にされてきたんじゃと。

雨が降らん日照りの時には、川や井戸の水もかれて、井戸水がわりに
池の水が使われたということなんじゃ。

だいぶ前のことじゃが、ある年、大日照りがあってな、川はからからに干上がり、
井戸水も出んようになった。人にとっても、稲にとっても、
八幡池の水だけが命の水となったそう。

雨が降るようと、雨ごいをしてても雨は降らん。そこで村人たちは相談して、
命の水である池の水を使うのをきびしく制限していたのじゃ。

ある朝、一人の村人が、池に行ってみると、前の日よりも
池の水がたいそう減っていたと。驚いた村人は、村にとんで帰り、
「おーい大変じゃ、大変じゃ。八幡池の水がぼっこう減っとるぞ」と、
村中にふれ回ったと。それを聞いて、村人は、次々に八幡池に集まってきた。
「ひどい減りようじゃ。昨日より一尺(約三十センチ)以上も少のうなっとるぞ」
「だれか、夜の間、池の栓を抜いて、自分の田んぼに水を当てたんじゃないか」
「そうじゃ。だれかが水盗人をしたに違いない」それから村人たちは、
次々に田んぼを見て回り、少しでも湿り気のある田んぼがあると、
「こりゃ、九郎兵衛の田じゃ。九郎兵衛のやつ、水盗人をしたな」
「なに、わしが水を盗んだと。人をどろぼう呼ばわりするな。
おまえが盗んだんじゃろ」村中で水のけんかになり、みんながうたがって、
人を見たら水泥棒に見えるようになったそう。

その壺

大和神社のつめなし竜

ところが、次の日もその次の日も、池の水が減るので、一晩中、池の水の番をすることになったと。二人ずつが、池の土手で寝ずの番をした。

真夜中になったころ、ザワザワ、ザワザワ、ザワザワ、草を押し倒しながら、何者かが近づいてくる音がしだした。

「そりゃ、水盗人が来たぞ」

「どこのどいつじゃろうかな。とっつかまえてやらにゃあ」

二人は、闇の中で、音のする方を見つめとった。

そこに現れたのは、人ではのうて、おそろしい大蛇だった。草を押し倒しながら、水際まで行くと、大きな口をあけて、ズズーツ、ズズーツ、ズズーツ、ズズーツと、音を立てながら、池の水を飲み始めたんじゃ。水はずんずん、ずんずん減っていくと。

二人は、ぶるぶるふるえながら、声を出すこともできんかった。しばらく水を飲んだ蛇は、また、草を押し倒しながら帰っていったのじゃ。

「水盗人は、蛇じゃった」

「大きな蛇じゃ。これまでに見たこともないような、おそろしい蛇じゃ。きょうとかった。きょうとかった。」

水番の話聞いた村人は、このままでは生きていくこともできん。

蛇を退治する以外に方法はない、ということになった。

そこで、蛇の通った跡をつけて、退治することになったと。

草が押し倒された跡をつけていくと、池から山の方へ上がっていき、大和神社の拝殿の中に続いとった。

「太夫さん、お宮から蛇が出て、八幡池の水を飲んどりました」

「蛇が出んようにしてつかあさい」

さっそく、太夫が調べてみると、拝殿の竜の彫りものまで跡がついていた。

その二

大和神社のつめなし竜

「竜が蛇に姿を変えて、水を飲みに行っとたんじゃろうか。

それとも、竜を蛇と見間違えたんかもしれん。どねえかせんといけんなあ」

太夫は、竜が出歩くことができんように、足のつめを切り落としたそうな。

それからは、竜が出歩くこともなくなり、八幡池の水も減らなくなったということじゃ。

今度、大和神社に行ったら、拝殿の竜の彫り物をようよう見てごらんなさい。

足のつめが切られとるからな。そういう話じゃ。

再話 立石 憲利

【吉備中央町のむかし話 岡山「へその町」の再話集 より抜粋】

その参